

野中を車で走せて途に大寺の趾などをにらんで濱邊へ来る。そこが乃別府である。西からすれば無論阿彌陀別府からでも加古川驛でもよい。順々に見て廻ると一番この別府は彼の有名な瓢水瀧野翁の出生地で今も此處の寺に碑が在る。『さればとて石に蒲團も着せられず』『手に取るな矢張野に置けれんげ草』などの句を知らぬ人はあるまい。瓢水此地に生れて此地に歿したので翁が佳話逸事などがなあ。澤山ある。

さて別府の手枕の松といふのは實に有名の松で別府港口の風景絶佳なる濱邊に石の玉垣打廻されて在る、其中に千年の翠を滴らせてゐる。一夜寝て見む手枕の松なぞ云ふ古歌が澤山ある尾上などのやうに版に摺つて松の繪を茶店で賣つてゐる。

それから又此處と尾上との中間に濱の宮といふ社があつて、この松林は實に立派なもので人によると却て尾上よりは優てゐるといふ人もある。無論松露などは多くはへる。海鰻の美味なると蛤の大さなのを取ることの面白さは別問題としておいて播州の四勝を案内してこの一勝を省くといふは親切な案内ではない。然も順路で尾上よりは地績とも云ふてよい濱宮をも見ることが

世の播陽の名所を歷遊する士女達必ずこの勝地を見脱したまうな。また尾上の松林からはかの著名的の大刀田山鶴林寺が適地(高砂も無論なれど)もある。或人がよんだ歌に物思ひすれぬ身にもわすれけり。憂を新野邊の里にやせりて

## 諸國風俗

無家無住

◎當年一月發行の文藝俱樂部に札幌の風俗が書いてあ

## アイヌの熊祭

自老地方のアイヌであつて北海道では下場處のアイヌと云ひますが此等のアイヌの熊祭が他のアイヌの熊祭とは少し相違して居る箇處があるかも知れないが兎に角私の見たのは昨年の二月です、北海道でも白老地方は風の寒むい事が名

つたが其の内にアイヌの氣性や何にかの事が一寸書いてあるが成程アイヌは外貌よりは餘程柔和性質であつて我々内地人に逢ふ時は彼等の敬語にて『エヤニ』或は『シャモ』等の言葉で敬意を表するですが彼の札幌風俗の内に女でも毛だらけで男か女かまるで見分の付かぬ様に書いてあつたが、あれは少し大袈裟過ぎる様に思はれます。第一女は髪が長いし又身体のつくり様が總て男よりは矯奢であつて而して一班に口の上に西洋人の髪の様に入墨をして居ります、或は手の甲に異様の入墨をして居りますが夫は紫琴君の申す通りです、又酒宴の時用ゆる三味線は丁度琵琶に似ておつてまだ琵琶よりは竿が長くて不合間に出来て居る、之を持って酒宴の時は彼等の女即ちメノコは歌舞謡歌するのです。

○先づ左様な事は脩ておき記者先生の御注文の熊祭は私もあまり深くは知りませんけれど私の見た通りの事を一應御話し申ます處で私の見たのは即ち膽振の國

過ました位の児を捕つて来て而してメノコは之を自分で育てて其の乳で養育或は飲食物をすべて其の熊兒と一處にして成長するのです而して大凡そ一歳位にもなれば性分の悪

い地金を現すが左様なると、とても劍呑で人の手では養ふ事が出来ない様になります。其處で自分の家の傍に丸太材を以て檻を作り其の内で其を養ふのです處で其の檻の内に入れるのは大抵満二歳位からです、而して其の四尺四方ばかりの狭い天地を勇猛なる熊兒は籠の鳥か鐵窓の囚人かの如く、長い年月在其内で送るのです、其の間の食物は馬齶薯、玉菜、豆腐のカラ、或は鼠の死屍魚類の殘物を以て成長せます、夫れですけれど其の毛皮は非常に能く發育して或は金毛ともなり或は銀毛ともなり、或は黑白の斑點ともなります、夫れは其の熊の性質に依て其の毛色は變るのです、而して其の金毛と云ふのは最も高價に賣買されます。

○處で其の檻の中で育てられた熊兒が四五歳か又は大抵三四歳にも成ると最も猛惡の性質を現はして恰も蛟龍の風雲を望と云ふ様な凄まじひ勢で吠へ猛て居ります、左様な様ですから到底長く養ふとが出来ないからして其の熊を屠るのです、其の時の祭が即ち熊祭なのです、然乍ら其の熊兒がメノコには大層好く狎れて居りますから、何程怒て狂ひ廻て居る時でも其の自分の母即ちメノコに一度叱かれ、ば丁度犬が主人に叱られた時の様に耳を垂れ尾を下げて平身低頭してしま

ひます夫れだけ熊兒はメノコを畏れて居るが又メノコも其の熊兒を自分の生兒の様に愛して決して慘酷な取扱ひはいたしません、而して其の熊の児も年をとつて既に屠らるる運命が頭上に降つて來た時は其の家の主人公は其の部落内は無論他の部落にも通知して客人を招待するのです。

○傍て其の熊を屠る式場とも云ふ處は其の祭をする家の北の方面に向た場所に五六間の柵を結び其の結び着けられた木の高さは大凡そ七八尺もあつて、其次是五六尺其の下は三四尺と云ふ様に階段を附けて作ってあります、但し第一番に高い木は最も奇麗に樹皮をむき其の木を又御幣の様に恰も采配の様に作った物を高く其の上には刀剣の輝々たるもの、又其の上には熊笹を花の様に束ねた物を中段に又下段は千差萬別夫れは種々雜多の供物があります、先づ左右には刀剣の輝々たるもの、又其の上には熊、狐、狼、兔、などの頭部の白骨を羅列し其他種々の武器、古器物又は彼等の意匠を凝せし美術品飲食物供供へるが夫れに付いても其の式場を北向けて作る云ふのは皆な一様だと聞きましが夫れに付いては何にか面白曰くが有るだらうと思ふが未だ其の事に付いては聞いた事もありません、又彼等の生命と頼む處似て居て枕よりは深く又蓋もありません、又足の附いた臺もあつて矢張り昔の大名の方の用ひし品物の様に見えます、彼等の手製の濁酒を呑む器物は通常我々の用ひる枕に



の弓毒矢は最も鄭重に取扱はれます、先づ招待された人數丈け弓を持ち出して一弓に矢二本を束ねて其の式場に立て、あります、然し前の毒矢と云ふのは此の祭に用ひるのであります、只だ供物丈けです、此の毒矢は山中で熊を射殺す時用ひるのであります、祭に肩る熊兒を射るのではあります、其に羽根を付け、而して矢先には柳草の充分生長して全く木質に變化した竹の様になつたものを三尺程に切て其に羽根を付け、而して矢先には柳草の二寸程に切て之に黒でもつて唐草の様な模様を付け之を又削て白い毛でも下がった様にして其の矢を二本と弓に結び付けたま、柵の前に立て、置きます夫れですから其の矢は決して鋭利なものではありません、男は大層立派な陣羽織をして居りますが左様な者がどうして彼等の手に入りしものか不明いで計りです。

やがて式場の準備も調ひますれば其の主人公は無論其の一家族や招待された人々は又出來得るかぎり衣服を着飾ります、男は大層立派な陣羽織をして居りますが左様な者がどうして彼等の手に入りしものか不明いで計りです。

す、又刀なども頗る立派な者を持て居りますが、或人の話には外觀のみ大に立派ではわれぞ中身は赤鰯宜しくと云ふ様な者だと云ひましたが夫れもどうだか臆測の話しですから深くは信じられないと思ひます、或は又實際左様だかも知れません、又斯く立派な昔の御大名でも持つ様な物をどうして持て居るかと聞く聞いて見ますれば昔し吾々同種族の奸商が彼等の蒙昧暗愚なるを附目にして種々の体裁計り立派な嫌にびかく光る物計り持て行けば熊の皮と交換したり、或は熊膽、砂金杯貴重な物と交換ではない寧ろ欺き陥れて誤間かして来るのだといひます、又其の熊祭に用ひる什器は矢張立派な物です、彼等の手製の濁酒を呑む器物は通常我々の用ひる枕に似て居て枕よりは深く又蓋もありません、又足の附いた臺もあつて矢張り昔の大名の方の用ひし品物の様に見えます、彼等の手製の濁酒を呑む器物は通常我々の用ひる枕に

處で其の儀式に取かる前に招待された人々は其の椀に例の濁酒を満々と注いで夫れに長さ一尺程の柳で作つた箸の如き物一本横に渡してあります。が之も矢張小刀で丁寧に削り恰も白い菊の花でも付けた様な者です。夫を以て其の北の方面に作られた棚の許に屈んで何にか呪文をとなへては其の濁酒を上下左右に再三再四はぢき出しても立つたり屈んだりして殆んど一時間も其様にしては祈禱して居ります。夫れですか朝未明より取かゝつて日没後までもかかるのが通例です。又あれ丈の儀式をしながら其の規則の定まりないのは驚き入る程です。やがて其の祭に立ちあつた人は皆なその祈禱が終ると其の棚の右側に席を敷いて棚と直角に坐ります。又其の棚の左側に棚と一直線に直径五六寸長さ一丈程の材木を二本置いてあります。が、是れぞ是れ能児にとつては絞殺臺とも断頭器とも見らるゝもので、誠に果敢ない命の断目です。

其處で先づ一ト通り用意も終ると御本尊の熊を檻の内から引張出す一件ですが、之れがなかなか見物です。前にも言た通の矢ですか



主人公、毛髪鬚髪を櫛り沐浴して身体を清め頭や頸などにいろいろの玉を連ぎし飾を掛け身には陣羽織を着て充分に盛装して右の手には一條の繩を携げて其の檻の上に現はれます。而して天地間の神祇に祈禱を申上後に其の携へた繩を板の間から戻に作て垂れ下げるのですが、熊はなかく其の戻に掛りません。多分かくか繩が自分を死に導く引導の繩目と思つてか、兎に角掛るのではあります。其處で慈母の如く慕ひ、我が子の如く愛して育てた熊にメノコが繩を甘く引掛るので、血氣の壯者五六人も檻の上に現はれ出で、其の檻の蓋を取りのけます。から熊は非常に凄じい顔をして一と飛に飛び出ますが、其の飛び出るが早いか遅いか、此處一瞬間、間一髪の隙もなく左右から繩を強く引き付けてから、モウ自由に動くとは出来ません。終に屠場まで無理に引き立てられ、屠場と云ふのは其の檻を結んだ所であつて其處に行、前に其の海岸のひろくとした實に堪へられぬ程寒むい風の吹く所を左右から引張て手をゆるめない壯者は皆なはだしで雪の五六寸もある處を一二町の間彼方へ引張り廻し、此方へ引

張り廻してモー殆んど息を凝して歩るなく成る程にして、其に招待された老人等の前につれて來ます。其の時棚の一一番近い處に座をかまへた老人が先づ一ト箭弓に引違へて熊を射るのです。前にも言た通の矢ですか

最も謹慎して静肅にかまへて居る老人供の顔つきが實に百鬼晝行とも云ひたい様な顔をして居ります。熊を射ればすぐに壯丁が繩を引いてヤンヤくと掛聲して又二町も先に引張つて行きます。又第二の老人の處につれて来ますと、亦た一ト箭熊を射るのです。又つれて行く、又来る、又射ると云ふ

有様で老人十人居れば十度二十人居れば二十度、千編一律同じ事をして最終になれば最も盛んに掛聲して何やら薩張わけの分らぬ歌を謡て、一箭熊を射てしまへばれで此の儀式も終つたのです。斯様な事をして居る

○處で妙なるは先きに愛兒を惡魔の手に渡した慈母が此時人目も外聞もあつたものでない、大きな聲をしめて泣き出ますが、夫れにつれてほんとの小供が皆な泣き出す終には其邊の女等は皆な泣き出すのです。其の

泣いて居る間も一寸の間ほんの義利で泣くのですから又すぐ平氣な顔をして居りますが、其の育てた母は全く黄泉に旅立つて多くの人に睡涎されて居る金毛の皮はそろく彼等の最も大切にして持つて居る小刀で

少しあは悲しい様に見えます。二三時間前までは猛勇當るべからざる勢の熊公も今は全く黄泉に旅立つて多くの人に睡涎されて居る金毛の皮はそろく彼等の最も大切にして持つて居る小刀で

むき始められます、此時一列に並んで居た老人が一度に立上げ前の柵に飾てあつた弓の箭を天の一方北に向

て高く射放ちます、此時は皆な口々に何にか呪文をとなへては射て矢の盡ると共に此の儀式も全く終ります

其の射た矢が廣々とした野に落ちて来ますから、其の矢の先の影物をしてある丈けの處を拾うとして小兒供が黒山の様にたかり付いては死力を盡して争う様は實に一奇觀です此間にアイヌの小舎の内ではすべての料理も調製して居りますが熊の肉の未だ來ないのが待遠

居る鍋の内には何があるだらうとの問題がむねに湧いて来てどうかして彼の鍋の中が見たいと思つて居る中に黒赤い熊の肉が一人の壯者の笑顔と共に小舎の内に這つて來たですから此際見て呉れやうと思って居る中に一人のメハコは其肉を受取て無難作にデクと切て

鍋の中に入れましたが、其の鍋の中の御馳走はまるで彼にやらざりしてまるで豚の御馳走の様な物を不

恰好な椀に盛ては盛に喰ひ始めましたが、此時二十人ばかりの處女らしい女が鎧々に盛装をして其の酒宴計の妙齡の處女らしい女が鎧々に盛装をして其の酒宴の間を左右に周旋して居りました、矢張彼等も妙齡の女のおしゃくで呑む濁酒は餘程甘いと見れます。

○又郊外では雲突く計の大兵男が頭に笠を戴いて變に黒いきたならしい餅を散りますが、此の時は又大の奇觀で老人でも老婆でも小兒でも小守でも近郷近在から之を目的にして來る者が澤山ですから其の賑は實に見物です。

○又招待された老人たちも手作の濁酒に泥酔ふて或は先づ斯様な工合で一軒の家の熊祭も終りますれば又他の一軒で始めます、其様にして一部落に一年中二三度もあれば手一ぱいで、昔はまだ六ヶ敷儀式が澤山あつたそうですが、只今の熊祭はざつとこんなも

周防吉敷郡陶村(山口町より南四里許りの處)近邊の水祝ひの式は、古より舊暦の正月十四日の晩に行ふ、陶村近邊のみではない、周防長門全体大同小異此式を

のです、尚ほ彼等の貴重品の來歴や儀式に用ひる什器物の出處又彼等の奇病、藥類や宗教觀念、其他風習については後ちに報道いたしませう。

たま、カモイワツカ(酒)、ワツカ(水)、エヤニ(汝)、ニシバ(誰々様)、チヨウカイ(或はクワニ自分)、ヤンカラフツテー(今日は)、エヤランケレー(左様なら)、ピリカメノコ(美婦人)、モクロ(寝る事)、ヲマン(行く事)、マチカチ(兒)、セカチ(男兒)、サバ(頭)、オドンベ(尻)、アチャボ(父)、ハンボ(母)、

詳細なる御報道に接し、有難く御禮申上候、猶下度願上候、尤も御文書御然達の事さて如何にもおもしろく拜見致候(松魚)

## 陶村の水祝ひ